補筆済

遺書回想録
創立百周年に寄
586 弁行より

被爆全滅部隊

昭二十理乙2　竹本　孝

あの終戦前の一年間の思い出話が始まると、私共五十代の連中は何時間たっても話がつきない程しゃべりまくる。それは子供達からみると誠に不思議な現象で、なぜそこだけそんなに詳しく微にいり細にわたって覚えているのか分りかねているようである。それは私の一生のうちで最大の出来事であったからばかりではなく、原爆を境目に私の生活も世の中もすっかり変ったという、思い出の峠道だからなのである。

昭和二十年八月六日、私は夕方の汽車で岡山を発ち、福山から福塩線に乗り換えた。岡山が空襲で焼けたあと大学が中国山脈の奥へ疎開することになり、下宿を焼け出された学生は家へふとんをとりに帰れという指示のためであった。ところが、岡

山駅では広島行の切符は発行停止命令が来ていて、旅行証明書を出しても売ってくれない。呉線経由でもだめで芸備線経由ではと尋ねると、それなら指示がないから売ってあげましょうという。やっと福塩線芸備線経由広島行の切符を手にして終列車で府中町駅につき、駅の待合室で仮眠して翌七日朝一番の芸備線で広島へ向った。

備後十日市ですれちがった列車に白い包帯を頭や手に巻いた人がチラチラ見えた途端に、こちらの車内も異様な雰囲気となってざわめき始め、やはり広島が空襲でやられたかと覚悟をきめた。広島の三つ手前の駅からなかなか発車せず、降りて歩こうとしたら又そろそろと動き始めては止るので、途中で列車を捨てて線路伝いに歩くことにした。大内越峠をこえて東練兵場へはいると、「敵ハ広島市ニ曳火高性能爆弾ヲ投下セリ、我ガ方ニ相当ノ被害ヲ生ジタリ」という貼り紙があった。広島駅も焼け、駅前郵便局入口の石段が昔の偉容を誇るように露出していた。道路も一面に瓦が散乱する中を歩いてゆくと、騎兵隊踏切のそばの家では母親が赤ちゃんを抱いたまま焼けただれて横になっており、さつまいものように赤くはれていたのを覚えている。転がっている者は男も女も年寄も子供もみんな髪の毛が焼けて丸坊主だから、遠くから見た位では男女の区別もつかず、屍体だと思ったのが急にごそりと動いたりして驚くことがあった。常盤橋の北の鉄橋には貨物列車が転がっていた。しかし、そこから西へ向って白島は見渡す限り焼け失せており、広島城の北は運が良ければ焼け残っているかもという僅かな期待は一瞬に消え去って、ああ、やっぱりだめかと観念した。

正確には「我ガ方ノ被害甚大ナリ」で市内へ入る者への警告であろうが、当時の禁句故まさかと疑って信じ難い人もあろうと思い表現を変えた。

やっとたどりついた白島東中町の我が家は完全に焼け落ちており、物置の片隅の真鍮火鉢の中のコーライト（泥炭？）がたどんのようにまっかだった。手押ポンプの水を手ですくってかけたか、茶碗など拾って使ったのか、とにかく水で火を消しておいた。数日後それが程良い消し炭のようになっていて、おかゆを炊く貴重な燃料として役立ったことを覚えている。荷物の疎開先の一番近いのが牛田だから、家族の生死は先ずそこから探し始めなければと思った。途中で白島の川土手の北に数軒が焼け残っており、その一軒に母の親友徳永さんを訪ねたが母は来ていないという。その隣の私の同級生道岡の家に寄ってみても彼は帰っていなかった。牛田の二叉土手の奥の清水さんの家は天井が落ちたり大分いたんでいた。その裏の二葉山の横穴防空壕に母も祖母もいた。敵機がいつ機銃掃射に来るかもしれないからみんなここにかくれているのだという。広島が全部焼けているのに機銃掃射などに来るもんですかと、やっと納得させて家族を横穴からつれ出した。

父は広島の特設警備隊長をしていたので、五日夜から勤務中

だったと聞くと、忙しくて家のことなどかまっておれない立場だと分っていても、果たして生きているのか死んでいるのか、それともどこかで重傷に喘いでいるのかが心配で、とにかく先ず手分けして父を探しにとりかかった。母は基町の偕行社の部隊本部を中心にして兵隊さんにきいてまわり、私は市の周辺部を歩き続けて軍隊らしきものを片っぱしから探し歩いた。「中国第七一六一部隊を知りませんか？」と何十人何百人きいても、「知らん」の返事ばかりだった。「兵隊さんならあそこにいるよ」と聞いて行ってみると暁部隊だったりして、ただ歩いて訊いて疲れるばかりの連続であった。

母の言によると、五日午後8時の警戒警報で非常出勤する時に父が「世話になったのう」とひとこと言って出て行ったので、今日はおかしなことを言うてじゃのうと思った由。部部へ少量のビラを米国機が撒いたそうだから軍の上層部だけは覚悟していたのであろう。

何日目だったろうか、府中の川土手の草原にごろりと横になって眠ってしまい、眼がさめたら赤い夕日がぼんやりと西の空に浮んでいた。黒の学生ズボンに黒靴ゲートル姿で、上は国防色の開襟シャツに角帽という服装だったが、それで夏の炎天下を歩き廻ってもその夏だけは少しも暑いとは感じなかった。

飛行隊の兄がくれたシャツで町では珍しいものだった。

牛田は白島の避難指定地区ではなかったので非常食糧が貰えず、疎開荷物の中の一升瓶1本につめた米だけが、家族の唯一の食糧であった。そして、おかゆよりおもゆに近いものに塩を少しいれただけの食事を朝晩食べるだけであった。あとは行く先々で道端の手押ポンプの水をのんではとぼとぼと歩き続ける毎日であった。井戸水を飲むなと貼り紙があったが、水だけが頼りなのだからそれで死んでも本望だと居直って飲み続けた。

部隊本部の扉から出た瞬間に被爆したので建物の下敷になりなかった人位に死んだ。

我が家の庭に植えた筈のさつまいもを思い出して行ってみると、葉は焼けていたが茎の一部が残っており、土の中には小指ほどのいもが出来ていて、すじばかりみたいなものだが、炊いてしゃぶるようにして食べたことを覚えている。又、母が兵隊さんにわけて貰ったにぎりめしを大切にハンカチに包んで持ち帰り、「子供がいるんですがというたら兵隊さんがもう一つ呉れちゃった」と涙をこぼさんばかりに有難がっていた。この二つが、当座の最大のご馳走であった。私の母はひとりっ子だから随分と勝手な人間であるが、この戦時中の食い物に一番不自由した時に、自分の食べる量を減して子供に食べさせてくれたことは今でも忘れられない。之が母の愛の真の姿であると心から感謝している。

父の最期を知っていた川添中尉を、母は幸いにも数日で探しあてた。しかし、私がその人に会おうとした時にはもう亡くなられたあとであった。部隊本部の焼け跡の三体のうち、これが父の骨だと母が言うのを、私も一緒に拾って帰った。片方の膝は黒焼の塊であった。もしまちがいだったらごめんなさいと合掌した。

結局、父の部隊は全員警備勤務中だったので、生き残ったつもりの人達も次々に原爆症で死んでいった。最後に残ったのは、三篠橋の火薬庫のそばの糧秣事務室にいた粟村軍属（五十一年

に癌で死亡）と、多分そこへ自転車で行っていたらしい山本曹長、運良くあの瞬間に防空壕へ書類をとりに入った女子事務員、当日特別休暇などで非番だったため自宅で被爆して幸いに生き残った数名の人達だけであった。文字通りの被爆全滅部隊であった。そして、それから一～二カ月後に、私の手のひらの皮が厚さ一ミリ程ぽろりとはげ落ちた。

（「広島市医師会だより」五十六年八月十五日号より）

現在百米道路になっている所など、建物疎開は「3日以内に立ちのけ」という命令を受けた。隊員の妻が立ちのき命令を持って部隊へ来たら、当時としては最大の一週間の特別休暇を出した由。荷造りと大八の手配に3日・輸送1日・送り先での整理3日という理由なのだそうである。

平常は仕事のことは一切家では言わなかった父が、或る日帰宅するとすぐに「今日は実に悲しかった」と言ったそうである。部隊は警報発令時以外は建物疎開をしていたのだが、或旅館の老婆が「この家は私が一生懸命に働いて一生かかって建てました。どうぞ遠慮なく家を引き倒して下さい。私はこの家と一緒に死にます。」と坐って動かなかったそうです。父は「私もつい先日長男が戦死した身です。お気持はよく分りますがすべてお国のためですから、私のいうことをきいて、どうか立ち上っていただけないでしょうか?」と説得し、老婆は泣きながら立ち上ってくれたのだそうです。之が自宅で思わず口から洩らしたたった一つの仕事の話だったそうです。

日露戦争の時日本を守ろうと特別志願して軍人になった父の最後は、被爆全滅部隊　中国第七一六一部隊でした。

広島高等学校
創立六十年記念

青春回想録

―広高その永遠なるもの―

昭和58年9月30日発行

編　集　広高青春回想録編集委員会
題　字　羽　白　幸　雄（昭4・文乙）
発行者　廣島高等学校同窓会
広島市中区国泰寺町一丁目三番二六号
電話（〇八二）二四三―六七七一
制　作　株式会社東方出版
印　刷　株式会社有文社印刷所
広島市中区光南三丁目五番六号

オリジナル

被爆全滅部隊

昭二十理乙2　竹本　孝

あの終戦前の一年間の思い出話が始まると、私共五十代の連中は何時間たっても話がつきない程しゃべりまくる。それは子供達からみると誠に不思議な現象で、なぜそこだけそんなに詳しく微にいり細にわたって覚えているのか分りかねているようである。それは私の一生のうちで最大の出来事であったからばかりではなく、原爆を境目に私の生活も世の中もすっかり変ったという、思い出の峠道だからなのである。

昭和二十年八月六日、私は夕方の汽車で岡山を発ち、福山から福塩線に乗り換えた。岡山が空襲で焼けたあと大学が中国山脈の奥へ疎開することになり、下宿を焼け出された学生は家へふとんをとりに帰れという指示のためであった。ところが、岡

山駅では広島行の切符は発行停止命令が来ていて、旅行証明書を出しても売ってくれない。呉線経由でもだめで芸備線経由ではと尋ねると、それなら指示がないから売ってあげましょうという。やっと福塩線芸備線経由広島行の切符を手にして終列車で塩町駅につき、駅の玄関で仮眠して翌七日朝一番の芸備線で広島へ向った。

備後十日市ですれちがった列車に白い包帯を頭や手に巻いた人がチラチラ見えた途端に、こちらの車内も異様な雰囲気となってざわめき始め、やはり広島が空襲でやられたかと覚悟をきめた。広島の三つ手前の駅からなかなか発車せず、降りて歩こうとしたら又そろそろと動き始めては止るので、途中で列車を捨てて線路伝いに歩くことにした。大内越峠をこえて東練兵場へはいると、「敵ハ広島市ニ曳火高性能爆弾ヲ投下セリ、我ガ方ニ相当ノ被害ヲ生ジタリ」という貼り紙があった。広島駅も焼け、駅前郵便局入口の石段が昔の偉容を誇るように露出していた。道路も一面に瓦が散乱する中を歩いてゆくと、騎兵隊踏切のそばの家では母親が赤ちゃんを抱いたまま焼けただれて横になっており、さつまいものように赤くはれていたのを覚えている。転がっている者は男も女も年寄も子供もみんな髪の毛が焼けて丸坊主だから、遠くから見た位では男女の区別もつかず、屍体だと思ったのが急にごそりと動いたりして驚くことがあった。常盤橋の北の鉄橋には貨物列車が転がっていた。しかし、そこから西へ向って白島は見渡す限り焼け失せており、広島城の北は運が良ければ焼け残っているかもという僅かな期待は一瞬に消え去って、ああ、やっぱりだめかと観念した。

やっとたどりついた白島東中町の我が家は完全に焼け落ちており、物置の片隅の真鍮火鉢の中のコーライト（泥炭？）がどんのようにまっかだった。手押ポンプの水を手ですくってかけたか、茶碗など拾って使ったのか、とにかく水で火を消しておいた。数日後それが程良い消し炭のようになっていて、おかゆを炊く貴重な燃料として役立ったことを覚えている。荷物の疎開先の一番近いのが牛田だから、家族の生死は先ずそこから探し始めなければと思った。途中で白島の川土手の北に数軒が焼け残っており、その一軒に母の親友徳永さんを訪ねたが母は来ていないという。その隣の私の同級生道岡の家に寄ってみても彼は帰っていなかった。牛田の二叉土手の奥の清水さんの家は天井が落ちたり大分いたんでいた。その裏の二葉山の横穴防空壕に母も祖母もいた。敵機がいつ機銃掃射に来るかもしれないからみんなここにかくれているのだという。広島が全部焼けているのに機銃掃射などに来るもんですかと、やっと納得させて家族を横穴からつれ出した。

父は広島の特設警備隊長をしていたので、五日夜から勤務中

だったと聞くと、忙しくて家のことなどかまっておれない立場だと分っていても、果たして生きているのか死んでいるのか、それともどこかで重傷に喘いでいるのかが心配で、とにかく先ず手分けして父を探しにとりかかった。母は基町の偕行社の部隊本部を中心にして兵隊さんにきいてまわり、私は市の周辺部を歩き続けて軍隊らしきものを片っぱしから探し歩いた。「中国第七一六一部隊を知りませんか？」と何十人何百人きいても、「知らん」の返事ばかりだった。「兵隊さんならあそこにいるよ」と聞いて行ってみると暁部隊だったりして、ただ歩いて訊いて疲れるばかりの連続であった。

何日目だったろうか、府中の川土手の草原にごろりと横になって眠ってしまい、眼がさめたら赤い夕日がぼんやりと西の空に浮んでいた。黒の学生ズボンに黒靴ゲートル姿で、上は国防色の開襟シャツに角帽という服装だったが、それで夏の炎天下を歩き廻ってもその夏だけは少しも暑いとは感じなかった。牛田は白島の避難指定地区ではなかったので非常食糧が貰えず、疎開荷物の中の一升瓶1本につめた米だけが、家族の唯一の食糧であった。そして、おかゆよりおもゆに近いものに塩を少しいれただけの食事を朝晩食べるだけであった。あとは行く先々で道端の手押ポンプの水をのんではとぼとぼと歩き続ける毎日であった。井戸水を飲むなと貼り紙があったが、水だけが頼りなのだからそれで死んでも本望だと居直って飲み続けた。我が家の庭に植えた筈のさつまいもを思い出して行ってみると、葉は焼けていたが茎の一部が残っており、土の中には小指ほどのいもが出来ていて、すじばかりみたいなものだが、炊いてしゃぶるようにして食べたことを覚えている。又、母が兵隊さんにわけて貰ったにぎりめしを大切にハンカチに包んで持ち帰り、「子供がいるんですがというたら兵隊さんがもう一つ呉れちゃった」と涙をこぼさんばかりに有難がっていた。この二つが、当座の最大のご馳走であった。私の母はひとりっ子だから随分と勝手な人間であるが、この戦時中の食い物に一番不自由した時に、自分の食べる量を減して子供に食べさせてくれたことは今でも忘れられない。之が母の愛の真の姿であると心から感謝している。

父の最期を知っていた川添中尉を、母は幸いにも数日で探しあてた。しかし、私がその人に会おうとした時にはもう亡くなられたあとであった。部隊本部の焼け跡の三体のうち、これが父の骨だと母が言うのを、私も一緒に拾って帰った。片方の膝は黒焼の塊であった。

結局、父の部隊は全員警備勤務中だったので、生き残ったつもりの人達も次々に原爆症で死んでいった。最後に残ったのは、三篠橋の火薬庫のそばの糧秣事務室にいた粟村軍属（五十一年

に癌で死亡）と、多分そこへ自転車で行っていたらしい山本曹長、運良くあの瞬間に防空壕へ書類をとりに入った女子事務員、当日特別休暇などで非番だったため自宅で被爆して幸いに生き残った数名の人達だけであった。文字通りの被爆全滅部隊であった。そして、それから一～二カ月後に、私の手のひらの皮が厚さ一ミリ程ぼろりとはげ落ちた。

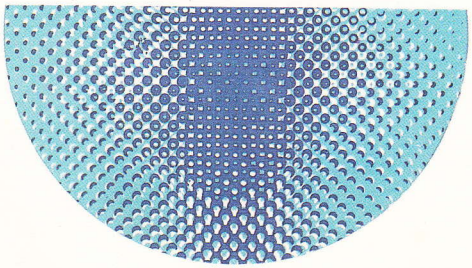
（「広島市医師会だより」五十六年八月十五日号より）

広島高等学校
創立六十年記念
青春回想録
―広高その永遠なるもの―

昭和58年9月30日発行

編集　広高青春回想録編集委員会
題字　羽白幸雄（昭4・文乙）
発行者　廣島高等学校同窓会
広島市中区国泰寺町一丁目三番二六号
電話（〇八二）二四三―六七七一
制作　株式会社東方出版
印刷　株式会社有文社印刷所
広島市中区光南三丁目五番六号

切手と郵便物でたどる
日本の原子力30年展



逓信総合博物館　10月28日㈫ ➡10月31日㈮

主催　科学技術庁、郵政省、日本原子力切手会、(財)日本原子力文化振興財団
協賛　原子力開発30周年記念行事実行委員会